野の研究が始まり，氏によってこれがうけつがれていた。

近世の郷と藩政村に関しては第2章，第5章，第8章がそれにあたる。藩政村を単位とする地域的ひろがりにもとめたフレームワークとしての歴史的領域に郷がある。郷の意味するところは多様で古代郷，中世郷，それを継承した近世の郷があり，さらに宮郷を中心としての山郷，水郷，墓郷，中世豪族の勢力圏としての郷などの相互の累積にも及んで把握する必要がある。それらがどのように変化しながら残存するか，氏は薩摩・大隅，土佐，周防・長門，讃岐，紀伊に事例をもとめた。とくに第8章は前述した三つのテーマを結合させた事例研究で，浜名湖北方の井伊谷，気賀地方の旗本近藤氏五家（金指，気賀，大谷，井伊谷，花岡）の知行地と郷荘との関係に対して鋭い分析を加えた。この章（論文）によってこれを端緒として将来，集大成に向って研究を進めようとした氏の意欲を感じとることができる。不幸にしてそれは遂に果たされなかったが，今にして思えば氏の旺盛な学問への情熱を燃焼させての結実であったといえるであろう。　（野崎清孝）

前田正名著　平城の歴史地理学的研究：風間書房，1979年，A5判553頁

中国およびその周辺に関して「歴史地理研究」と銘打った著作は，小川琢治『支那歴史地理研究』正・続（1928年）を嚆矢として，戦後比較的多く刊行された。例えば，松田壽男『古代天山の歴史地理学的研究』（1956年），前田正名『河西の歴史地理学的研究』（1964)年，日比野丈夫『中国歴史地理研究』（1977年），佐藤長『チベット歴史地理研究』(1978年）などがあげられる。しかし，これらの著作の著者は，小川先生を除くといずれも東洋史学の硯学であり，残念ながら地理学者ではない。本書の著者，前田正名氏も現在駒沢大学文学部東洋史学科の教授で，長年にわたり中国西北辺・北辺を対象地域として，東洋史学の立場から歴史地理学的研究に従事されてきた。本書は氏が昭和42年4月から昭和52年3月までの10年間，立正大学に在職していた時期の論考をまとめられたものである。はじめに掲げた氏の前著は河西通廊一帯を対象地域とした歴史地理学的研究であり，本書は前著の方法論を基礎として，対象地域を平城・桑乾河上流域においた研究である。

東洋史学の側からの歴史地理学研究ということで，地理学を業とする者として，正直に言ってかなり違和感を覚えることは否定できない。それは研究の対象は共通していても，その研究の目的・方法あるいは結論が，われわれの歴史地理学のそれとかなり異なっている点にあると思われる。しかし，その点において，われわれが従来見落としてきた，あるいは持ち得ない分析の視角があり，反省させられることが少なくない。以下逐次，内容を紹介していきたい。

本書は以下の内容から構成されている。

第1章　北魏時代における桑乾河流域の自然地理
第2章　住民構造
第3章　平城都市景観の展開
第4章　平城をめぐる交通路
第5章　平城をめぐる家畜類・畜産品・獣類
第6章　平城における交易について
第7章　平城と河北平野との経済関係
付篇（1）　平城付近・桑乾河流域・隣接地域人口流動一覧表
付篇（2）　四～五世紀における太行山脈東麓路
付篇（3）　三～五世紀における太行山脈東麓の地域構造に関する論考—住民構造を通じて

はじめに桑乾河は山西省北部の管涔山に源を発し，北東に流れて河北省北西部に至り，永定河と名を変えて南東に流れ，北京市西部を経て天津市に至り，海河に注ぐ。毎年桑の実が熟するころに川の水が涸れると伝えられるところから，この名がある。この河が中部を貫流している盆地が桑乾盆地である。海抜600～1,000mで，山西省の北部から河北省北西部の内・外長城の間にわたる。この地方は中国農耕地域の北限地帯に近く，歴史上，中原王朝の勢いの盛んな時期には漢人による農耕景観が展開し，北方遊牧民の支配が波及する時期には農耕景観は衰微し，代って牧畜景観が卓越した地方である。漢北遊牧民の勢力が南方の中原地帯に向って発展してくる時，必ず経由する地方で，その点において中国史上に重要な位置を占めてきたという。また平城は現在の大同市で，鮮卑族の拓跋部が黄河以北の華北平原を征服し建国した北魏帝国の国都である。386年，諸部族に推戴されて魏王となった拓跋珪（太祖）は，都を盛楽に定めたが，398年に国都を平城に遷し皇帝の位についた。これより493年，孝文帝により洛陽への遷都が強行されるまでの約1世紀の間繁栄した。すなわち北魏帝国が胡族の国家から脱皮して，魏晋の伝統を継ぐ中国的な国家へ成熟する過渡期の国都

であった。しかし，その都市としての実態は，氏の研究以前にはほとんど明らかではなかった。

第1章では桑乾河流域（桑乾盆地）を大同盆地と壺流河流域を中心とする下流域に二分し，それぞれについて北魏時代の水文環境を史料をもとに明らかにする。北魏時代には桑乾河水系を流れる水は現在よりも豊富で，泉地・沼沢が多数存在していたという。そのことが，牧畜の適地として多数の遊牧民を蝟集せしめ，この地方をめぐって諸族間にいくたの戦いを引き起こした原因であった。また平城が北魏の国都として約1世紀繁栄できた要因の一つに，この水文条件に恵まれたことが掲げられる。

第2章では，平城・桑乾河流域の地域構造・社会構成を1世紀から5世紀末までの時期の住民構造の変化，すなわち中原王朝の支配力の後退による遊牧民の進出と，この地方の支配権をめぐる遊牧諸族間の勢力争いの分析を通して明らかにする。漢代には，この地方は鴈門郡・代郡の主要部で，漢人の植民が比較的盛んであった。しかし魏晋時代になると中原王朝の勢力がおよばず，漢人の集落は衰微した。代わって遊牧民の勢力が卓越し，1世紀中期より南匈奴・烏桓が，さらに鮮卑が進出してきた。以後，3世紀初期までこれら遊牧民族と後漢軍との，あるいは遊牧諸族相互の戦いが絶えなかった。2世紀中期には鮮卑の拓跋部の勢力が強大になり匈奴・烏桓は圧倒された。その後，匈奴・烏桓は拓跋部の社会に吸収され諸族の混血がすすんだ。347年，拓跋部が大挙して北方より徙住して以後，この地方は完全に拓跋部の支配下に置かれた。北魏は建国後，征服した諸族を次々にこの地方に従した。特に，平城遷都以後，太祖期に後燕を滅した直後，河北・山東方面から漢人・高麗人など46万人，世祖期に蠕蠕・高車・漢人・西域人など50万人を平城に徙したという。その結果平城の周辺には約100万人の諸民族が混住し，特異な人口過密地域を形成した。これら混住する諸民族の日常活動が北方の国際都市平城の経済的発展を支えたといえる。しかし5世紀後半には水旱・饑饉が頻発し，さらに493年に洛陽へ遷都した後は，人口も激減してすっかりさびれ歴史から姿を消した。

第3章では，北魏の国都となった平城の中国風の二重城壁都市としての実態を，楊守敬の『水經注圖』など乏しい史料をもとに諸施設を復原考証しながら明らかにする。

第4章では，北方の政治・経済・文化の中心平城と各地とを結んで形成された諸交通路を詳細に復原考証し，平城・桑乾河上流域と外部地域との結びつきを解明する。それらの道筋は史料に残された北魏軍の征討路，および諸国から来貢する朝貢使たちがたどった朝貢路を復原することから明らかとなる。諸交通路のうち，特に重要であったのはオルドス砂漠の縁辺を通り，秦州路・河西路を経て西域諸国に通じる交通路と，平城から南下して中山城を経て河北平野の玄関口に達し，穀倉である河北農業生産地域と北魏の本拠地を結ぶ交通路であった。中山城は平城と河北・山東方面とを結ぶのみならず，太行山脈東麓に沿う交通路により，満州方面や黄河流域・河南方面とも平城を結びつけた南北交通上の要地であった。北魏は中山城を治所とする定住経営に力を注ぎ，中山城は中継交易で繁栄したという。ほか，北方遊牧民から家畜・畜産品が平城に流通する漠北と結ぶ交通路，庫莫奚・高句麗・契丹・夫余など東北諸国が北魏に朝貢した交通路などが通じていた。著者はそれぞれの交通路の経由地を明らかにし道筋を地図上に示している。それらの道筋や経由地の比定等細かな点については多くの問題があると思われるが，古代の北アジアの交通路を復原された意義は大きい。

第5章～第7章では，前章で復原された交通路を通って征服地から送られてきたり，朝貢という官営交易の形で外国よりもたらされる物資と，それらを消費する平城の経済的特色が明らかにされる。とりわけ農業経済の基盤が脆弱な地に，度々の徙民政策により多数の過剰人口をかかえた平城が，いかに饑饉にもろく，河北平野に日常の食糧の多くを依存していたかを明らかにする。この経済基盤の弱さが，孝文帝に平城から洛陽へ遷都を強行させた一つの要因であるという。

付篇では，まず2世紀から5世紀の間のこの地方での住民の流動を史料から詳細な一覧表に示し，諸民族の勢力の変化を明らかにする資料とする。次に3世紀から5世紀における太行山脈東麓に沿う南北交通路を，軍事行動の分析を通して明らかに，その地方の地域構造を住民構造の変化という視点より分析する。

以上，簡単に本書の内容を紹介したが，平城時代の北魏帝国の国家の性格・特徴を自然環境，徙民政策による諸民族の混住，各地へ伸びる交通路とそれを通じてもたらされる様々な物資などの歴史地理学

検討を通じて論じた労作である。当時の北魏が遊牧民の国家からの脱皮を図りながら，多数の遊牧諸族を内部に抱え，また経済的基盤の弱さから，遊牧国家の特色である略奪経済の変型である各地からの朝貢により支えられ，洛陽へ遷都するまで実現できなかったことがわかる。ところで，著者のいう歴史地理学研究はわれわれの考えるそれとは，はじめにも述べたようにかなり異なる。このことはさきに掲げた「歴史地理研究」と銘打った著作に共通していえることで，いずれも歴史地名・行政領域・自然環境・交通路の復原考証に主眼を置いた沿革地理的研究をもって歴史地理研究としている。論文集である日比野氏の著書以外は中国那境地方を対象地域とした論考である。その地域の歴史がほとんど明らかでない北アジア・内陸アジア・中央アジアでは，こうした地道な沿革地理的研究の積み重ねが歴史の流れを再構成するため必要不可欠な基礎作業となるが，そこに個々の都市や集落の形態，耕地や道路網の形成など景観論的研究がないことにわれわれの違和感や不満の原因がある。しかし，それを要求するのは酷であるし，われわれの方が反省すべき点でもある。近年，中国では雑誌『歴史地理』が刊行され，史念海『河山集』（第1集，1963年，第2集，1981年），侯仁乏『歴史地理学的理論与実践』（1979年），同『歩芳集』（1981年），馬正林『豊鎬—長安—西安』（1978年），鄭徳坤『中国歴史地理論文集』（1981年），黄盛璋『歴史地理論集』（1982年），同『歴史地理与考古論叢』（1982年），『中国歴史地理論叢』(1981年)，『江蘇城市歴史地理』（1982年）など著作集・論文集が続々と出版されている。なお，沿革地理的研究が多いのは否めないが，景観論的視点をとり入れたり，地域構造論まで発展させた研究も少なくない。中国の歴史地理研究を東洋史学者だけに任せず，われわれ地理研究者が積極的に取り組むことの必要性を痛感する。（林　和生）

中島健一・　灌漑農法と社会＝政治体制：校倉書房，1983年，A5判229頁

著者の中島健一教授は，本書を出版する前に，すでに古代オリエント文明に関する歴史地理学的労作『古オリエント文明の発展と衰退』ならびに『河川文明の生態史観』の2冊を出している。第3冊めの『灌漑農法と社会＝政治体制』は，従来の成果を集大成したものといえよう。

本書は前編と後編からなっているが，前編は，降雨帯の移動によっておこされた，後氷期の近中東地方における気候変動にともなう歴史の構造変化の歴史地理学的研究である。その内容は，後氷期のサハラ周辺地方やナイル川流域における食用植物の栽培化，家畜の飼養の起源の問題と，エジプトのファラオー（帝王）体制への発展や貯留式の灌排水農法との社会対応，およびその発展過程について，現地調査をふまえた上で記述したものである。後編は，前編の構想を世界史的に裏づけ，歴史地理学の面から，著者の生態史観にのっとって，国際的研究動向を整理している。その主要点は，本書を通してK・A・フォン・ウィットフォーゲルの「治水文明論」についての仮説の検証・修正にもあてられている。

つぎに本書に対する著者の態度は，従来のわが国の歴史学界で，人間生存の歴史を解明する際，自然史的諸条件に対する関心がほとんどなく，「地理的決定論」と決めつけて，いわば，定量的な史観であったことに着眼し，自然史的諸条件とのかかわり合いの諸契機を，定量的にその比重を考え，社会諸科学と自然科学との統合の上に立って，人間生態学に統一を企てようとしている。

そこで，天水農耕から灌漑農法への発展については，まず，新石器への移行をおこなったところは，いずれもオリエント中緯度地帯などであったことに注目している。ここでは丘陵斜面，谷口，オアシス周辺であったが，人々は河川の氾濫原が著しく肥沃であることに気づき，そこに生活の本拠を移すようになった。著者は，紀元前4,000年ごろ，つまり「亜降雨期」の末，気候の乾燥化にともなって，その沖積地が，天水農業地に比して4～6倍以上もの収穫があったことを立証し，そこでこれに対応すべき社会—政治体制と新しい灌漑システムが問題となったと考えている。

この点について，ウィットフォーゲルの仮説をみると，乾燥・半乾燥地域においては，大河流域の灌漑用水の利用について，農民は行政的に運営される巨大な作業組織をつくり出さねばならず，また，季節的氾濫の制御の治水事業も必要であった。彼はこのような治水灌漑農法を治水農業 Hydraulic Agriculture といって，天水農業や小規模な水利農業と区別している。この社会では，それを構成するものは第一に治水政府，第二に単一の中心をもつ社会，またそれにより営まれる治水農業であるとした。そしてこ